若手医師リレーエッセイ
Spirits
スピリッツ

私的音楽考

旭川医科大学病院　初期研修医
板谷実朱花（いたやみずか）

釧路生まれ、北見→旭川育ちの生粋の道産子です。写真は学生時代のオーケストラでの一枚。社会人になってから中々参加できていないので本番でしか味わえない絶妙な緊張感と興奮が恋しいです。

岸浪建先生よりバトンを受け取りました、旭川医科大学病院の板谷実朱花です。岸浪先生は高校時代の友人です。大学進学以降は中々顔を合わせる機会がありませんが、同じく研修医として頑張っている同期がいるというのはとても励みになりますね。昔から勉強も部活もパワフルにこなしていた岸浪先生のことですから、きっと研修医としてもバリバリ働いていることでしょう。

さて、何を書き連ねようかと頭を捻っている12月現在、研修医として働き始めて半年とちょっとが経ちます。新しい科を回る度に分からないことだらけで勉強しなければと焦るばかりですが、少しは４月から成長できているのでしょうか。先日、３か月間の救急科研修が終了しました。毎日目まぐるしく過ぎていく救急医療の現場に圧倒されながらも、上級医や優秀な同期の支えのおかげで乗り越えられたように思います。忙しくなればなるほど、上手く息抜きをして気持ちを切り替えることが大切だと痛感しました。私の息抜きは専ら音楽です。昨夏にはPMFのコンサートを聴きに行きましたが、自分でもたまにヴァイオリンを弾くこともあります。

ヴァイオリンは小さい頃に習っていて、数年のブランクの後大学の部活動で再開しました。室内合奏団という、４種類の弦楽器（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス）で編成される学生団体です。コロナ禍以前は病院のロビーで入院患者さん向けにコンサートを開いたり、一年に一回ホールを貸し切って吹奏楽器と合同でオーケストラ編成での演奏会を行ったり、数多くの演奏機会に恵まれました。空きコマを見つけては、開学時から建て替わっていないオンボロの部室に直行し、夏は扇風機、冬は暖房の前を友達と奪い合いながら陣取っては自主練半分、お喋り半分の楽しいひと時を過ごしたのは良い思い出です。

演奏するのは純然たるクラシック音楽から流行りの洋楽までなんでもござれで、地域住民向けの演奏会で「津軽海峡冬景色」で盛り上がったり、合奏用に自分たちで編曲した「スーパーマリオ」のBGMメドレーを弾いたりしていました。一方、オーケストラとしてはやはりクラシック音楽に触れることが多く、私は「くるみ割り人形」「白鳥の湖」等で有名なチャイコフスキーがとりわけ大好きで、奇遇にもこれまでに何度か演奏できたのは幸運でした。西欧への羨望も感じさせるほどの抒情的で流麗な旋律の中に、土俗的な雄大さと荒涼とした情調を内包する彼の楽曲には、厳寒の地に生まれ育った同士（と並ぼうとするのも恐れ多いですが）だからか感じ入るものがあり、まさに今時期の底冷えする空気や寂寞感を思い起こさせます。……と論じると高尚を気取っていると誤解されそうですが、クラシックほど我々の生活に浸透しているジャンルもないと密かに思うのです。

多くのクラシック作品に親しめる作品といえば映像化もされている「のだめカンタービレ」が筆頭かと思いますが、もっと身近なところでは、某胃腸薬のCMにはショパンのピアノ曲が、白い犬がお父さんの携帯会社の歴代CMにはチャイコフスキーをはじめ、ドビュッシー、バッハなどの有名曲が使用されています。とある給湯器メーカーはお湯はり完了の通知音をクラシック曲から一部抜粋しており、商標登録までされているそうです。寒い日が続く今日この頃、お風呂にゆっくり浸かりたいなと思った時にはぜひ通知音にも耳を傾けてみてはいかがでしょうか。

ところで、医学という科学の一分野を生業に選んだ身でありながら、音楽の真髄は「再現性のなさ」にあると実感することが度々あります。指揮者や演者が違えば勿論ですが、全く同じ編成での演奏であっても、壇上に満ちる空気と一人一人の精神的、身体的コンディションによって（最終的には時の運までもが絡み合い）、発される音色は決して二度は体験し得ないものになります。どれだけ練習を重ねても、奇跡のような素晴らしい演奏ができることは、悔しいですが多くはありません。ですがその分、良いものを生み出せた時の喜びは何ものにも代え難く、さらにはその瞬間を夢想しながら試行錯誤し、地道に音を刻むことさえも音楽の魅力なのだと思います。医療の世界では再現性のない治療なんて百害あって一利なしですが、だからこそとも言うべきか、相反してそんな不確かなところにも興じられる音楽を今日も愛して止まないのかもしれません。